

## 地中海古代都市の研究 (123)

## 古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008 (1) 概況

正会員 ○谷皓司\*<sup>2</sup> 伊藤重剛\*<sup>1</sup> 吉武隆一\*<sup>3</sup> 林田義伸\*<sup>4</sup>中之丸諭志\*<sup>2</sup> 國武真由美\*<sup>6</sup> 準会員 足立義幸\*<sup>5</sup>

9. 建築歴史・意匠 - 4. 西洋建築史 建築歴史・意匠

ギリシア メッセネ 劇場

## 1. はじめに

熊本大学ギリシア古代建築調査団(団長 伊藤重剛)は、2008年よりギリシアの古代都市メッセネにおいて、メッセネ考古学協会(代表 元クレタ大学教授 P. テメリス氏)が発掘した劇場の実測調査を開始した。劇場はまだ発掘途中の部分を残しているが、スケーネ(舞台建物)の発掘はほぼ完了しており、今年度の調査(2008.8.6~9.23)では、スケーネの平面、断面、および部材の実測を行った。本稿では、その調査報告の一部として劇場の概要についての報告を行う<sup>1)</sup>。

## 2. 劇場の概要

劇場はアゴラの北西隅から約20m西に、自然の斜面を利用して作られている。アゴラとの間には舗装された坂道の街路を挟んで「アルシノーエの泉」が隣接している(図1)。現在はオーケストラ、スケーネ、パラドスの壁、西側から北側にかけての外壁などが残っている(図2)。しかし、オーケストラに接する最下部を除いて座席部分の殆どが破壊された状態で出土し、現在は土砂がむき出しの状態となっており、座席がないゆえに一般的な古代劇場の姿を想像するのがやや困難な状態である。

建設時期は定かではないが、発掘者によるとギリシア式の劇場が前3世紀に建設され、後に後2世紀にスケーネが新しく建設されたとされている。また、ローマ帝国が滅びると同時に、劇場も破壊され、劇場の部材は隣接する教会などの部材に再利用された。

## 2-1. 劇場外壁

劇場は斜面を利用しているものの、座席数を確保するために上部は当時の地上レベルよりも高い位置まで作られており、そのために擁壁が作られている。現在までの状況で、特に西側から北側にかけての部分が当時の地上レベルまで発掘されており、立派な擁壁が露出されている。この擁壁の西側に沿って北から南へ

真っ直ぐに、下水道が約50mの長さで出土している。下水道は、大きさ1~2mで厚さ10cmほどの石板を手荒に敷き詰めたもので、これはスタディオンのプロピロンに通ずる道路の下水道と同じものである。この下水道の面が当時の地表面と思われるが、擁壁はそこから最も高いところで約4m、石の段数で約10段が立ち上がっている。

北西の隅には、この擁壁から外側に向かって幅約2.5m、長さ約10mの階段が残っており、これが劇場の主階段のひとつだったと思われる(写真1)。また、西側の擁壁には、細い急な階段が3か所に残っている(写真2)。

擁壁は石灰岩の切り石で整層積みの非常に堅固なもので、ところどころ段差の違う石も使われている。

## 2-2. オーケストラと座席部

オーケストラ(写真3)の直径は21.6m。オーケストラ部分での通路の数は10であり、座席は11の部分に分割されていた。オーケストラの外縁部は矩形の石で縁取られている。石材の幅はまちまちだが、約40cm程度で、数メートルおきに、10~15cm角の穴の開いた正方形の石材を配置している。オーケストラの縁石の外側は幅約50cmの水路となっている。水路の中央の東側には、シンクが出土しており、おそらくここが小泉水として使用されていたものと思われる。現在も水は出ており、この水路は機能している。オーケストラの西側で水路の上には独立の貴賓席が2箇所出土している。オーケストラ内部は約20cm角の小石板で舗装がしてあり、茶、白、灰などの色付きの石材を使用している。オーケストラ内部北側、小泉水の近くには祭壇が作られていた。

## 2-3. パラドス

パラドス(写真4,5)は座席の端部の壁面であり、ギリシア劇場では役者が登場する通路であった。メッ

セネの劇場ではパラドスは東西にあり、三期の様相が観察される。

一般にギリシアの劇場では座席の平面形状は半円より大きい角度をなす。ローマの劇場は半円をなし、両側のパラドスを結ぶ線は直線となる。ここでは東の第1パラドスは半円以上の角度を構成するが、西側ではこれに対応する壁は見当たらない。しかし、西パラドスの壁の中央低部ではそれ以降に作られた壁と角度を

なしている部分が明らかに識別できる。これはおそらく最初はギリシア式劇場として建設しながら、途中からローマ式に変更したことを示していると思われる。このことは、西の第2パラドスの線が東の第2パラドスの壁の線と対応をなしていることから明らかである。また、西側の第3パラドスも東の第3パラドスと直線となるようにに対応している。

第1、第2のパラドスの壁がポロス（茶色で柔らかい多孔質の石灰岩）で出来ているのに対し、第3は石灰岩の立派な石積みとして残っている。

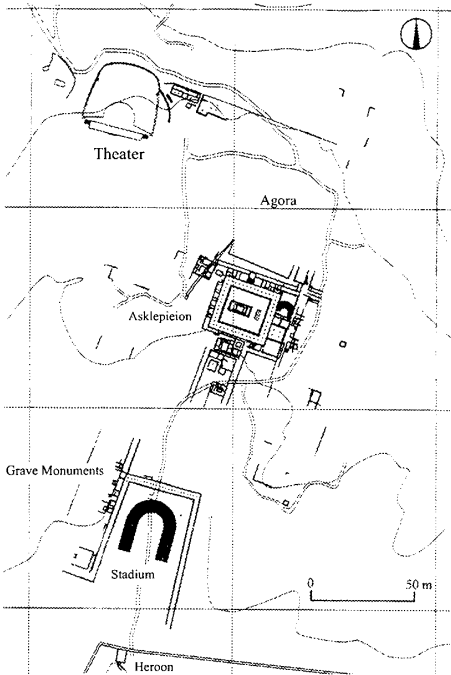


図1 メッセネ遺構地図

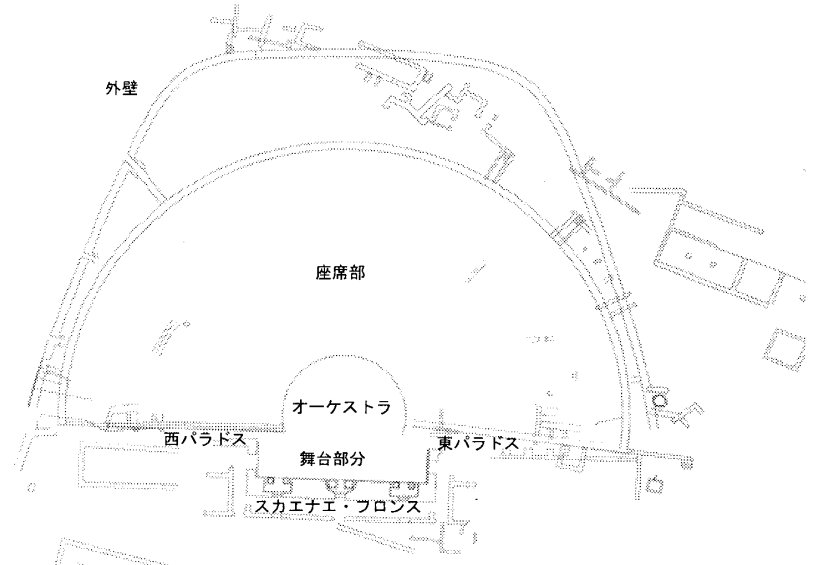


図2 劇場平面図



写真1 北西から見た擁壁、階段、排水路



写真2 西側擁壁、階段

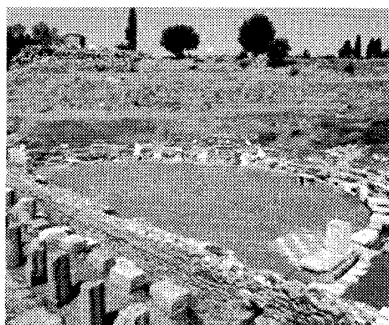


写真3 南西から見たオーケストラ

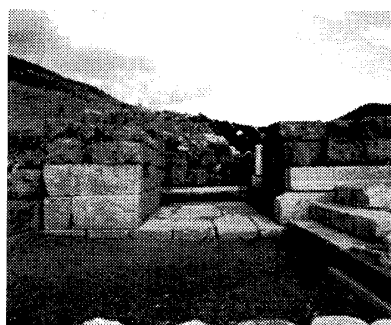


写真4 東パラドス

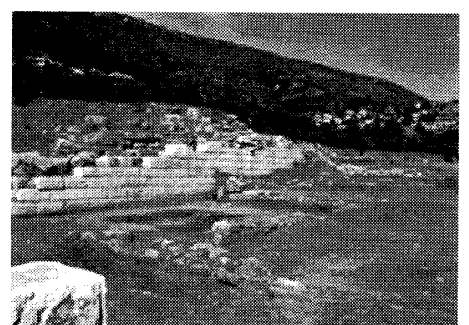


写真5 東パラドスの壁

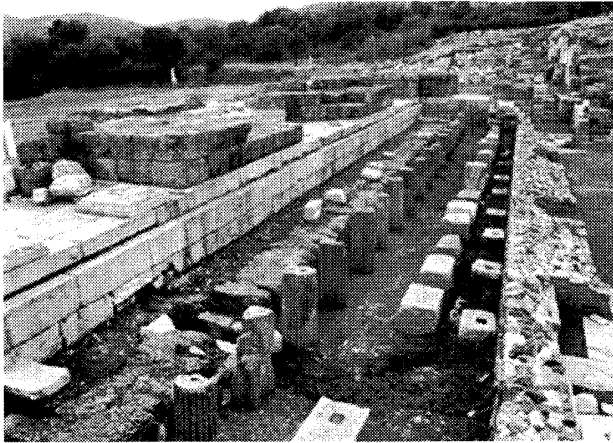
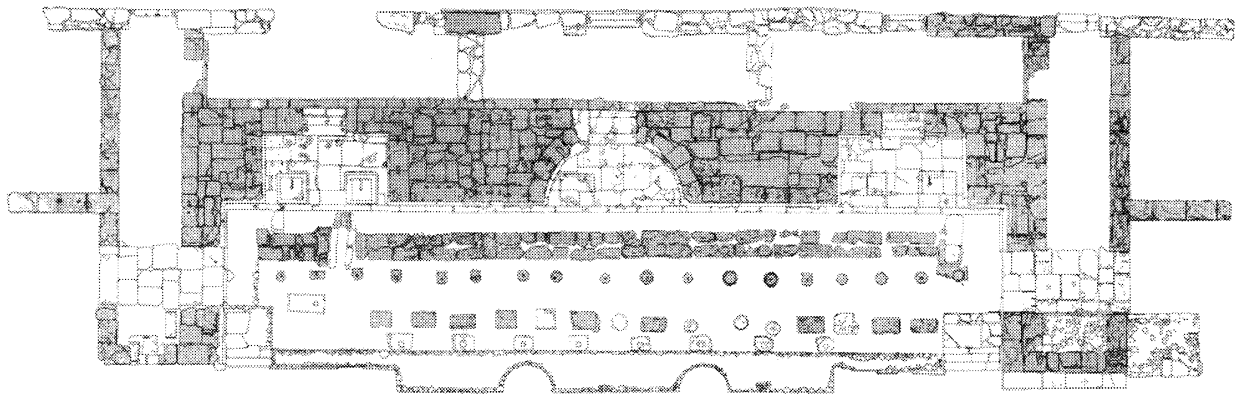


写真6 北東から見たスケエネ舞台下



写真7 南東から見た後室



Plan of Scenae Frons, Theater of Ancient Messene

図3 スケエネ平面図

## 2-4. スケエネ

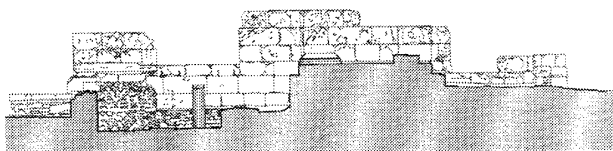
### i) 舞台部分

舞台の下はポロスの壁の基礎部分、再利用のコリント式ないしはイオニア式円柱ドラムの列、石灰岩の円柱ドラムや矩形部材の列、正方形のスラブに正方形の穴をあけた部材の列、合計4列になって舞台の下にスケエネの全幅 29.47m にわたって並んでいる。そして、オーケストラに面しては、下部がオプス・インケルトウム上部がオプス・レティクラトゥムのプロスケネウムウォールが約 1m の高さで残っている (写真6)。

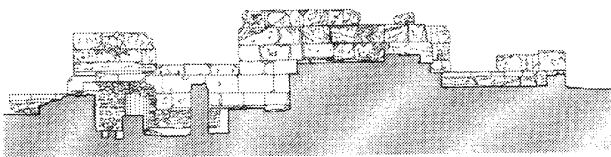
### ii) スカエナエ・フロンス

スカエナエ・フロンスは、全体がコの字形をした劇場の舞台ないし、舞台背景となる建物である。何度かの変遷を経ていることが確認される。正面の内法長さは 29.47m、最終段階の舞台前面だったところまで張り出した両側の袖の長さは 6.10m である。

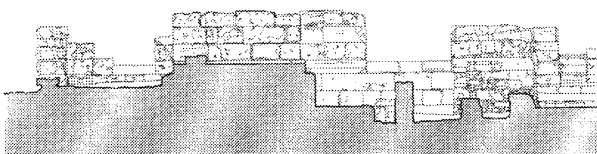
建物上面には両側が矩形、中央が半円形の3つのニッチが作られている (図3)。これらニッチの正面両脇には、円柱の台座ないし、その痕が残っている。モールディング付きの台座は 1.10m 角で、東ニッチに



N-S Section at east niche (looking east)



N-S Section at central niche (looking east)



N-S Section at west niche (looking west)

Section of Scene Building of the Theater

図4 スケエネ断面図

2つ残っている。他の2つのニッチには台座 (Base) は残っておらず、床面に1.20m角の痕跡のみ残っている。

	東側ニッチ	中央ニッチ	西側ニッチ
正面幅	4.59m	5.02m	4.58m
奥行幅	2.58m	2.35m	2.61m
後入り口幅	1.63m	1.82m	1.63m

表1 ニッチ寸法

スカエナエ・フロンスは現在、床から下の部分、敷居や開口部の一部などが石灰岩で作られている。壁体の内部はポロスであり、これに大理石などで仕上げがしてあったものと思われる。ポロスの石は高さ0.43～0.47mの大きめの石を使っており、特に出隅部分などには、dove-tail(鳩の尾)型のクランプを使って補強されている。このポロスの壁体の厚さは3.45mのマッシブなものであるが、現在は床面から2～3段まで残っている。

スカエナエ・フロンスの背後には、各ニッチの後に東西に長いほぼ同じ大きさの部屋が3室並んでいる(写真7)。ニッチの入口と対応する南側の壁に開口部があるが、東側の部屋では破壊されていて確認できない。東西の部屋の端部の壁にはそれぞれ両脇の通路に通じる開口部の痕が確認されるが、敷居や立枠などは見当たらない。

これら後室の壁は、スカエナエ・フロンス後面のポロスの壁を除き、石灰岩で出来ている。

	東	中央	西
東西幅	9.72m	10.02m	9.75m
南北幅	2.92m	2.95m	2.85m

表2 後室寸法

スケエネの東には、舞台あるいはオーケストラへと続く通路がある。この通路は幅は2.41m、長さは11.88mで、南側に幅1.78mの入口をもち、北側のオーケストラへの階段までは13.40mである。この通路は舞台のところで、舞台袖への入口、その反対側への入口へ2つの開口部が開いている。

東側通路のさらに東には東側が吹き放たれた部屋が付随している。しかし、東側の吹き放し部分は後世の

壁で閉じられた痕跡がある。南側壁の東端部は、壁の端部の仕上げがしてある。

スケエネの西にも通路があり、南端に幅1.67mの入口がある。長さは10.40mで、東側と同じく舞台の入口と、舞台の反対側への入口がある。幅はともに2.32mである。この通路北端部の入口部分は、東通路と同じく石板で舗装してある。

東側通路では、北端部はオーケストラへ続く開口部があるが、西側ではその部分が後の時代にレンガの壁 (opus reticulatum) でふさがれている。西側のパダロスからオーケストラに続く部分は、東側と異なり、再利用の石灰岩を使って両側が狭められており、幅0.8mの狭い階段となっている。

西側通路の西側も、南側は西側に吹き放した部屋がある。東側と同様に南側壁の西端部は、壁の端部の仕上げがしてある。部屋の大きさは奥行3.72m、幅6.10m。スケエネ後室部分の南壁全長は46.60mである。

### 3. まとめ

今回の実測調査により、スケエネの平面図、断面図、および部材(59個)の図面を作成することができた。

劇場はアゴラの西に自然の傾斜を利用するかたちで作られており、ギリシャ式劇場から2度の改修を経てローマ式劇場へと変遷し、現在はオーケストラ、スケエネ、パダロスの壁、西側から北側にかけての外壁などが残っている。また、パダロスの壁に3期の様相が観察されることや、スカエナエ・フロンスが形成されていること、舞台の下に再利用の部材がおかれていることなど、至る所にギリシャ式からローマ式の劇場への変遷の跡を見ることができる。

### 謝辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤(S)課題書号20226012によって行われた。

### 注

1) これまで、地中海古代都市の研究の(97)から(121)の間に合計24回メッセネの調査報告として研究発表を行っている。

\*1 熊本大学教授 工博  
\*2 熊本大学大学院自然科学研究科 前期課程1年  
\*3 国士館大学イラク古代文化研究所研究員 工博  
\*4 都城工業高等専門学校教授 工博  
\*5 熊本大学工学部 学部生  
\*6 国士館大学イラク古代文化研究所研究員 博士(学術)

Prof., Dr.Eng. Kumamoto University  
Student, Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University  
Researcher, Dr.Eng. The Institute for Cultural Studies Ancient Iraq, Kokushikan University  
Prof., Dr.Eng. Miyakonojo National College of Technology  
Undergraduate Student of Faculty of Engineering, Kumamoto University  
Researcher, Ph.D. The Institute for Cultural Studies Ancient Iraq, Kokushikan University